

武井の島の伝説と逸話（旧戸井町史から）

・ムイとアワビ

昔々、下海岸の海に棲んでいたムイ（和名：オオバンヒザラガイ）とアワビが争いを始め、二つに分れて長い間争ったが、勝負がつかず、双方とも戦い疲れて仲直りをした。仲直りの条件として、境界を武井の島として双方の領地をきめることにした。そして武井の島の西方をアワビの領地、東方をムイの領地として、長い間の戦いがおさまった。それ以来、武井の島の西方には、ムイがおらず、東方にはアワビがいないのだ。

数十年前までは、ムイとアワビの棲息地の境界が、この伝説のように守られていたようだが、最近ではお互いに、この境界を越えるようになって来た。

・武井の島と弁天さん

「大阪の富豪『鴻（こう）の池』が、蝦夷地と交易をしていた、慶応3年頃（1867）、持船第二宝永丸に、鮭を満載して、年の暮も近い頃、石狩川の川口の入江を出帆した。出帆以来順風を満帆にはらんで南下したが、白神岬附近で暴風に遇い、風のおさまるのを待つて箱館の港へ避難しようとして、福島沖に碇を下したが、碇綱が切れてしまった。船は西からの強風をうけ、更に津軽海流に乗って、カイもきかず、『アレヨ、アレヨ』という間に、箱館山を通り過ぎてしまった。船頭並に乗組員は、運を天に任せ、神仏に無事を祈った。

不安と恐怖におののいている船人にかかわりなく、「情知らずのヒカタ風」が益々吹きつゝのり、潮流もいよいよ激しくなって、船体をゆさぶり、やがて汐首岬を越えて、武井の島附近にさしかかった。

ところが武井の島沖に来たら、潮も風も浪もウソのようにおさまり、日浦の入江に漂着し、船も破損せず、船組員も全員無事であった。

ヒカタの突風は、時が来るとピタッとウソのようにおさまるものだし、東流する潮流の終点は戸井沖なので、この二つが武井の島沖で、偶然一致したのである。

太平洋に漂流して死ぬことを覚悟していた、第二宝永丸の乗組員の眼には、武井の島が神の島に見えたものであろう。乗組員一同が協議して、武井の島に感謝する意味で、船の舳先（へさき）に、守護神として祀っていた『弁才天』の神像を、武井の島に移し祀って、蝦夷地を去ったのである。